

豊後「シヤア」村について

近藤 忠

はしがき

柳田先生の海南小記、三三頁「地の島」の章に「其よりも永くなつかしいのは豊後では臼杵灣頭の津久見島である。山が峻しいためか此島ばかり保安林に編入される以前も一向に斧斤を知らず、隙間も無く茂つた緑の樹の中から色々の鳥の聲が遠く波の上の舟まで聞える。シヤアの村からも稀に枯枝を拾ひに来る位で、人の歴史には縁の薄い島らしい」とあるこの文で、津久見島に枯枝を拾ひ来ると云ふシヤアの村とは其の名の珍しさから誰でも注意をひかれることであらう。併し「シヤア」と呼ばれる際この村の人達は非常に侮辱された感じを受けるので其でなくとも氣が荒くて喧嘩早いことでも有名なこの村のことであるから村の人に對してはうつかりでも口にしてはならない言葉である。此度の調査には一方ならぬ厄介もかけたし、出来るだけ「シヤア」と云ふ言葉は用ひたくないが、それでも海邊村小字津留ではこの村の感じが少しも出ず、また平凡に過る故此名稱を用ひた。村の人には充分

豊後「シヤア」村について

お詫びしておく。

リアス式海岸の特に完全な形を備へると言はるゝ臼杵灣の最も奥に當つて大友宗麟の居城として有名な瓜生島の城趾がある。名は島であつても現在では陸續き、一名龜ヶ城とも言ふ。突然の岩が恰も龜が甲から首を覗けたやうな恰好をしてゐるからである。城趾は眺望のよい公園となつてゐる。正面上には霞んだ伊豫の山々を背景としてこんもりと樹木の茂つた津久見島が圓錐形の靜な姿を浮べてゐる。公園から海に向つて左方、直線距離で五、六丁か、臼杵川の河口を扼した小丘の裾の邊に窮屈相に聚つた一部落がある。これが通稱シヤア村、即ち大分縣北海部郡海邊村大字諏訪字津留である。背後の小丘を的場山と言ふ。臼杵の地は日本全國何處よりも早く大砲の音を聴せた所、その大砲の射撃の的にでもなつてゐたためであらう。

部落の遠望は附近の漁村に比して見劣りはしないが部落内は貧民窟のやうで亂雑極りなく、足を一步踏入れるならば迷

路縱横に走つて、僅か百五拾の戸數にも拘らず慣れない人ならば一度訪れた家を次の日間違ひなく見出すことは六ヶ敷い程である。

一般に漁村は自負心が強く排他心が強いものである。仲々其の地方の空氣に同化されないものである。一峠越えた隣の村とは嫁の遣取一切せぬやうなことは普通である。或る廣い漁村地域を取上げ見るならば恰も其は都會の生活に譬へることが出来るであらう。同じく豐後の漁村でも元來の豐後人の部落もあれば、伊豫よりの移住者の部落もあらう、また中には長門出身の部落もあらう。隣村のことは我不關の有様は丁度都會の貸屋住ひの夫れである。

斯る村々の間にあつて更に數段の別天地を形成してゐるのがシヤア村、即ち津留村である。常に平家の後裔を以て自ら誇り古くから他部落と交際せず、冠婚葬祭總て部落内で行ひ濟まし敢て他に同化しやうとしない。調査ごととは全く困難で諸事を隠蔽するの風が強く、何事によらず秘密第一主義である。殊に他郷人であるならば村人の口から直接に部落内の生活などを聞出すことは六ヶ敷い。

一 シヤア村の成立に關する傳説

シヤア部落の人達は二口目には「シヤアと言つても元は平家の武士だ」と言ふのが常である。また彼等が餘りにも其熱心に主張するため

に別に其を吟味するでもなく地方民からはこの部落は平家の子孫だと信じられて來た。最近では此部落の人情風習或は言語が餘りにも豐後色と掛離れてゐるために村の由來を突飛にも直に國外に求めて南支那或は南洋を云々する者もある。

此等の意見は別として第一の仕事としてはシヤア村によく似た部落を見出すことに骨折つた。類似の部落と云ふも餘りに漠然としてゐるからシヤア村にあつて最も目につく特徴の一つである所の女達が頭に平桶を載せて行商に歩く風習の部落を探した。物を頭に載せて歩く風習、即ち頭上運搬の風習は世界的なものであり、また吾國に於いても決して珍しいものではない。併し頭上運搬に於いても特に底の廣い縁の淺い一見盥の如き桶、ハンボウ或はハンギリと呼ばれる桶を頭に載せ魚を賣歩く「カネリ」或は「カベリ」と名付けられる風習が中國・四國の瀬戸内海沿岸から島嶼にかけて處々にある。豐後の

シヤア村もカネリ、カベリの村の一である。

此等の村々は各々其の地方に於いて、豊後に於けるシヤア村の程度でなくとも、珍しい村だ特殊な風習の部落だとして眺められてゐるのである。カネリ、カベリの風習の如きも其の部落特有の風習であるかの如く間違ひ考へられてゐるものが多い。例へば日本地理風俗大系(中國地方、二七八頁)には長門豊浦郡安岡町のカネリの寫眞を掲げて「安岡町民の特殊な風俗としては婦女が鹽の如き器具を頭上に載せ、恰も大原女または朝鮮人の如く行商することである。その風俗はけだし珍奇である」と説明してゐる。兎に角此等カネリの漁村は各々地方的には注意されてゐても未だ全體として比較研究をしたものは無いやうに見受ける。今夏中國側に沿つてカネリ、カベリの風習の漁村を殆ど漏れなく尋ね歩いた。即ち次の如くである。

長門豊浦郡安岡町安岡 周防玖珂郡柳井町江ノ浦 安藝豊田郡幸崎町能地 備後御調郡中

豊後「シヤア」村について

庄村西浦 備後御調郡吉和村

豊後のシヤア村は平家の武士近藤五郎・蒲戸隼人・森川左源・篠原主膳の後裔で、壽永四年平氏滅亡の際以上四人の者は安藝豊田郡能地(ジツ)に難を逃れ其の地に定着したが、其の子孫に至り生計愈々困難となり、慶長十年春矢田惣兵衛・金剛與十郎・桶口太良・大原源兵衛・竹中六良の五家族が豊後沿岸を漂泊し遂に臼杵灣岸に定着して漁業を營むやうになつたと傳ふ。

以上の言傳へを更に二つの部分に分つて考へることとする。即ち第一は豊後シヤア村は安藝豊田郡能地から移り來たと云ふ言傳へ、今一つは平家落人の言傳へである。

安藝の能地は前掲の如くシヤア村と同様に代表的カネリ漁村の一である。能地は瀬戸内海に於ける漁民の流れを研究せんとする人にとつては最も注意さる可き漁村である。如何なる理由に據るか安藝の能地からは廣く瀬戸内海一帯に可成り多くの殖民部落が分派されてゐる。彼等

は所謂「能地流れ」と稱さるゝ一風有る漁村であつて一樣にカネリの風習を有す。彼等の多くが禪宗であり、また四國石槌山の信仰を有す。

彼等は他郷よりの漂着者であると云ふ理由からでもあらうが附近の村々から幾分輕視される風が以前はあつた。廣島の日宇那(ヒツナ)の漁村は能地流れであるために(珍しくカネリの部落ではないが)この部落の漁民に限つて毛利侯の嚴島參詣の際の用船鯨船には舵子に傭はれることを得なかつたと言ふ。能地流れではないが長門安岡のカネリの漁村も同様で、下關附近では「泣くと安岡のカネリに遣る」と母親が子供を叱る言葉がある。シャア村が平家の後裔であることを強く主張し部落の由緒を出来るだけ深めようとするのも附近村民の自己に對する態度への反抗でもある。

豊後シャア村が所謂「能地流れ」の漁村の一であることは確であらう。然も恐らく能地流れの部落中最も南方に位置してゐるものであら

う。豊後人には解しかねるシャア村の言葉もよく聞けば安藝地方の訛りが多い。恐らく何百年か以前の安藝の方言を郷里に於けるよりも忠實に豊後の土地で保持し來たのであらう。シャア村が安藝の能地より移住したのが今から約三百五十年前、因ノ島西浦は二百年前と傳へられる。瀬戸田・日宇那等の漁村は知られてゐない。豊後シャア村或は因島西浦も言傳へ等から推察するに安藝の能地から直接移り來たものでなく可成りの期間漂泊の生活を續けたらしい。併し海賊で有名な瀬戸内海のことであるから平凡な漂泊の生活であつたかは疑はしい。シャア村が白杵灣岸に定着地を見出してからも彼等は他郷者として恐縮や遠慮はしなかつた。彼等は全く不作法であつた。平家の後裔であり他部落よりは血統が良いと自負して地方の風習には寧ろ積極的に同化しやうとはしなかつた。シャア村が白杵地方に於いて以前は嫌はれるものであつたとするならば其の重なる原因は彼等が餘りにも禮儀

を辨へないからである。上長に對する尊敬の念を全く有してゐない。老幼男女の區別なく言語動作は殆ど無差別で、親の子に對する言葉と子の親に對する言葉とに差違がない。學校の先生に對しても同様である。まして妻が夫に對しては全々敬語を有してゐない。平家の後裔を自慢しながらも彼等には何等の氣品も見出せない。

次に平家落人の言傳へである。

シヤア村の出身地、安藝の能地も好都合にも同様に平家落人の言傳へを有す。最近「妙見」なる家から古刀が発見されたので土地の人は平家武士の子孫だらうと噂してゐる。能地にあつてシヤア村と相違する點は全部落民が平家の後裔であると云ふのではなく、唯平家が壇之浦に亡んだ際多數の武士が此地に落延び來て漁民に混り漁業を營むやうになつたと言ふのである。シヤア村の様に其等落人の人數・姓名或は階級の如きは全々傳へられてゐない。

更に豊後シヤア村と相違するのは安藝の能地

豊後「シヤア」村について

ではこの言傳へは大して問題にもされず、其に代つて村の由來の如きは殆ど神功皇后傳説を以てとかれてゐる。然るに此傳説は豊後シヤア村は勿論のこと其の他の能地流れの村に於いては見受けないやうである。女が頭に鹽の如き平桶を載せるカベリの風習も其の起源を安藝能地では神功皇后傳説を以て説明し、豊後シヤア村では平家落人の傳説を以てしてゐる。海賊村上氏で有名な因島西浦の言傳へでは豊後シヤア村に於ける「平家の落武者」が「中國の或る城の落武者」に置換へられてゐるに過ぎない。

長門のカネリの漁村安岡は能地流れではないが不思議なほど安藝の能地と其の傳説を合致せしめてゐる。平家落人の言傳へと言ひ、神功皇后の傳説と言ひ、或はカネリの風習を之等の傳説を以て説明しやうとしてゐる點など全くよく似てゐる。下關附近の伊崎のカネリ漁村、或は周防玖珂郡江浦から相浦にかけてのカネリの漁村は豊後シヤア村と同様に純粹な平家武士の

後裔だと信じてゐる。

豊後シャア村	能地流れ	平家落人	神功皇后
長門 安岡		平家落人	
長門 伊崎		平家落人	
周防江、浦相、		平家落人	
浦 安藝		平家落人	
能地		平家落人	
備後因島西浦	能地流れ	平家落人	神功皇后
備後 吉和	能地流れ	落武者	

此等カネリ、カベリの風習の漁村に於いて共通してゐることの二、三を考へるに、まづ第一に殆ど總てが他地方よりの移住者としてゐること、即ち能地流れ或は平家落人等の傳説を有す。第二は多くが祖先は武士であるとしてゐること、殊に平家の武士であるとしてゐること、第三はカネリ、カベリの風習も其の起源は大抵が各々自己の部落だとしてゐること、然もこの風習は由緒深い尊い風習だと考へてゐること、第四は彼等は多くが其の附近の村々から以前は幾分輕視せられる風があつたこと。

さて四國の祖谷(ヤ)或は九州の五箇莊は平家落人の傳説を以て有名である。斯る山村と茲に述べた如き平家落人傳説を有する漁村とを比較研究したならば興味深い結果も得られはしないだらうか。多くの島嶼を浮べる瀬戸内海は神話時代から吾國に於いて最も盛な民族活動の舞臺であつた。更に海賊・倭寇の本據であり屢々戰場ともなつた。此等にあやなされ地理的事情に恵まれて活潑な漁民の移住が續けられた。瀬戸内海漁民の流れが更に深く研究せられるならば豊後シャア村の成立に關する傳説の如きは今少し明確に云々することが出来るであらう。

二 血 族 結 婚

最近池見猛氏が血族結婚部落なるが故に豊後シャア村を取上げて、「血族結婚の可否」なる論文を發表された。吾國に於いて完全な血族結婚部落を見出すことは仲々容易なことではないやうである。然るに池見氏が血族結婚部落として斯くも手輕に訪れることの出来る豊後津留村を

見出されたことは成功である。

さてシヤア村、即ち津留村が矢田惣兵衛・金剛興十郎・桶口太良・大原源兵衛・竹中六良の五家族のみからして次第に人數を増して行つたと云ふは單なる言傳へに過ぎない。恐らく因島西浦に於けるが如く最初の漂着者は數家族に過ぎなくとも其の後郷里の能地から親戚縁者を集めて戸數を増加せしめたことであらう。兎に角シヤア村は移住してより今日に至るまで數百年の間と云ふものは完全に部落内に於いてのみ結婚して來たのである。従つて全村が幾重もの濃い親戚關係にあり、また現在從兄弟夫婦の如きは立所に幾組でも數上ることが出来る。

池見氏は何故に同部落が血族結婚をなすかを調査され、次の如き幾つかの原因を擧られてゐる。まづ一般に早熟で小學校卒業前後になると兩人にて口約をなし、兩人が二十歳前後になると結婚をする風習であると云ふことが第一の原因らしい。次に平家の末裔であるから他の部落

よりは血統が良いと自負してゐることが第二の原因である。他の部落の人との結婚は若い時代にはよいが年を取つて離婚した時にこまると云ふことが第三の原因である。第四の原因は他部落人とは風俗習慣を全く異にして、その上に貧民窟の様であるがため敢て交際をもとめないから他部落人と結婚の問題が起る機會がない。第五は一般の人が同部落人を別人となしてゐるがために子供を同部落の人に遣ることを嫌つてゐる。

安藝の能地・備後吉和・因島西浦・周防江ノ浦・長門安岡等も血族結婚の傾向、即ち部落内で結婚をする風が強いけれども、一般漁村には普通のことと特に度を越したと云ふ程のものではない。唯廣島日宇那の漁村は能地流れであるために最近まで他村とは結婚しなかつた。

濱邊村小學校の先生の話によれば此部落の兒童の中からは學業成績に於いても運動競技に於いても或は體格に於いても他部落兒童よりは拔

出て優秀な者を出す相である。全校生徒數五百人中二百人を占むる津留村ではあるが、津留村の小學校の感が有ると言つてゐた。併し同部落人は子供の教育と云ふことに就ては非常に無關心であるために磨けば光る玉を磨かずに終らせる場合が多いらしい。

シャア村の者は體格が他部落よりは優秀である。臼杵町での祭りの角力でも他村よりは何時も強い。大分聯隊でもこの村の者が一番強いと言はれてゐる。池見氏によれば同部落には闘士型の體格が多いとのことである。胴が長くて下脚の短いどつしりした體格の多いことは素人の目にもつく。

三 カネリの風習

今日の如く半永久的な女達の村外出稼の盛でなかつた以前にはシャア村に於いては鹽の如き平桶を頭に載せて行商に出る女の數は多かつた。ハンボウと呼ばれるこの桶に男の漁によつて得た漁類、或は他より仕入れたわかめ・こん

ぶの類を入れて行商に出て、これを農作物と交換して歸るのである。彼女等は十六、七貫の重みを頭に載せても平氣である。併し行商の際は七、八貫で、一日の行程は五、六里平均である。平素荷物を運搬するにも悉く之を頭に載せ決して兩肩に擔ふことをしない。

頭上運搬の風習は世界的なものである。この風習は殆ど女に限られてゐることも亦共通してゐる。斯る風習の行はれる理由は北の寒い地方では手を寒風にさらすことを避るためであり、また南方地方では猛獸毒蛇に不意に出會つた際に弱い女達は一散に駆出すことの容易であるためである。また傾斜地の多い地方では肩に擔ふよりは頭上にて運搬する方が急坂の上下に樂であるからである。吾國にあつても八瀬・大原女の柴刈の繪圖を見る如く頭上にて運搬することは昔は最も普通な女の運搬形式であつた。

今日でもこの運搬形式の多く見受けられるのは中國・四國の海岸から九州南部の地方であつ

て、瀬戸内海の或る島にあつては肥料桶さへ頭に載せて運ぶとのことである。品物を頭に載せる際には何か器具に入れるのが普通である。その器具の中でも多いのは桶の類である。屢々述べた如くその桶が特に縁の浅い底の廣いものを以てしてゐる所のカネリ或はカベリと呼ばれる頭上運搬の風習が瀬戸内海地方に行はれてゐる。

一 カネリ、カベリの名稱

女が頭に品物を載せて運ぶことを長門安岡・伊崎ではかねりと言ひ、かねつてゐる女達のことをカネリと呼んでゐる。周防江ノ浦・相浦でもカネリである。安藝の能地では頭上で運ぶことをかねりと言ひ、斯様にして運ぶ女達をカベリと呼んでゐる。因島西浦でもカベリ、備後吉和でもカベリである。豊後シャア村では別にカネリともカベリとも聞かなかつたが、併し部落人の間で言つてゐるとしたならば能地流れの村

豊後「シャア」村について

であるから恐らくカベリであらう。

シャアと言ふ言葉は全く意味を解しかねる。カネリ、カベリとは物を頭に載せた女達に對してのみ言はれるのであるが、シャアとは部落人全體男も女も指すのである。從來の解釋では彼等の祖先が平家の車を守る舍人、即ち「車者」であつたからそれが訛つてシャアと呼ばれるやうになつたと言ふのである。併し此解釋も頗る曖昧で、要するに分らないとして置く方が無難であらう。

二 頭に載せる桶

豊後シャア村ではこの桶のことを「ハンボウ」と呼び、盤帽と云ふ字を當つてゐる。長門の安岡或は伊崎ではハンギリ、字は半切、周防江ノ浦ではハンボウ、安藝の能地はハンボウ、因島西浦も備後吉和もハンボウである。

豊後シャア村	
長門 安岡	ハンボウ
長門 伊崎	ハンギリ
カネリ	ハンギリ

周防 江ノ浦	カネリ	ハンボウ
安藝 能地	カベリ	ハンボウ
備後因島西浦	カベリ	ハンボウ
備後 吉和	カベリ	ハンボウ

村の女が頭に載せて行商に出るハンボウ或はハンギリの大きさは部落によつて殆ど一定してゐる。

	直径	深さ		直径	深さ
豊後シャア村	55cm	21cm	安藝 能地	50cm	18cm
長門 安岡	44cm	18cm	備後因島西浦	50cm	18cm
周防 江ノ浦	46cm	20cm			

これから見てもカネリの漁村でも豊後シャア村の女が最も大きなハンボウを頭に載せて行商に出るわけである。備後の吉和は今ではカベリの風習の最も盛な土地であり、カベリの人數も三百人を越えるであらうと言はれる程であるがそれだけにハンボウも大小六通りの大きさを有してゐる。最大が直径53cm、深さは23cm、そ

れより直径・深さ共に1.5cm違ひとなつて最小は直径42cm、深さは14cmとなつてゐる。豊後シャア村のハンボウは備後吉和の最大型にほぼ比適するわけである。竹の輪も極く小さいのを胴に一本と底に二本締めてゐるのが普通であるが、豊後シャア村のハンボウのみが胴に巾約一寸ばかりの大きな輪をいれてゐる。長門安岡では家内用のハンボウと行商用のハンボウとを區別して、外に出る時のハンボウは楕円で作つた充分磨きをかけたものである。

三 カネリの風習に對する言傳へ

阿波の漁村にも「イタダキ」と稱さるゝ風習があるが頭上に桶を載せるのではない。伊豫の松前(マサ)のおたいの頭上に載せる魚用桶はハンボウとは恰好が違ひ深い桶である。加藤嘉明が松山城築造の際、松前の女子は石垣用の石材を頭に載せて運んだのでその報酬として石を載せた櫃に御用櫃の烙印を押し無税で城下に行商することが許され、御用櫃の烙印は今日では魚

用桶の烙印に代へられてゐる。

豊後のシャア村の頭上運搬の風習は源氏に追はれて逃げる際河を渡るのに飯袋の濡れるのを恐れて頭にのせたのから始つたと傳へられてゐる。長門の安岡では彼等の祖先は高貴な身分の者が身を落したのであるから荷物を運ぶにも肩になれず頭に之を載せ運ぶやうになつたと言ふ。この安岡のカネリに限り品物を賣る呼聲が「花買へ」「鯛買へ」「鯖買へ」と命令的な言葉を用ひるのも一の名物となつてゐるが、これも高貴の者として其の賣り言葉の使用法を知らず慣れたまゝの命令的言葉を用ひて賣り歩いたのが今日に至るまで残つたのであると土地の人は信じてゐる。

辭書を見るにハンボウとは甲斐・出雲・伊豫地方の飯櫃の方言としてゐる。以上の三地方に限らず飯櫃のことをハンボウと呼ぶ地方は其の他處々にあるらしい。安藝の能地でもハンボウとは元來は飯櫃のことであると云ふことを知つて

ゐる。而て何故に飯櫃に魚を入れ馬に載せ賣り歩くやうになつたかに就て次の様な面白い傳説を以て説明してゐる。

能地での名物は浮鯛である。四十八夜頃より八十八夜頃にかけて有龍島より約十數町の間の細長き淺瀬の影響を受けて眞紅の櫻鯛が海面に浮ぶ。それを船から手綱で掬ひ取るのである。神功皇后が三韓征伐に赴かれる際に能地に立寄られた。村人達は皇后に名物の浮鯛を献上せんとしたが、如何なる器具に入れ、如何なる姿で行つたものかに當惑した。考へた末新しき飯櫃に浮鯛を入れ頭に其を載せて皇后の前に出た。これがカネリ、カベリの風習の始りであり、他村は能地の風習を眞似たものであると云ふのである。

村々によつて種々の言傳へ傳説は存するが、要するに臺所の飯櫃を頭に載せたに過ぎない。豊後シャア村をはじめカネリ、カベリの部落にあつてはハンボウは臺所では何よりも必要な用

具なのである。運搬の際の容器であり、最も必要な世帯道具であり、餅或は壽司等を作る場合も皆このハンボウを用ひる。

四 行 商 區 域

ハンボウを頭にかねつた或はかべつた姿は最近急に見られなくなつた。シャア村でもこの二、三年で殆ど無くなつたと言つてもよい。長門の安岡では七十歳以上の老人唯一人が今尙この舊習を守つて下關にかねつて行商に出てゐる。周防江ノ浦では十年位以前からこの姿はすたれた。今尙盛にかべつてゐるのは因島西浦と備後尾道に近い吉和である。

さて豊後シャア村の女が行商には二種ある。

即ち近行商と遠地行商とである。

近行商——白杵町・下北津留村・上北津留村・南津留村、最も遠く進んで吉野村附近まで。

遠地行商——南は日向延岡の奥地より都城附近、西は大野郡・直入郡より肥後の阿蘇郡、北は玖珠郡・日田郡、豊前の曾根附近まで、

近行商は此村を中心として約十斤の半徑を以てした半圓であり、遠地行商は八十斤乃至九十斤の半徑を以て畫いた半圓である。此等二種の行商の内近行商はシャア村の女達にとつては暇潰しの程度に過ぎず、日歸りである。遠地行商となると其の日數も十四、五日から一ヶ月位にわたることも屢々である。春夏秋冬四季を通じて區別無く行商に出るが、それでも纏つた金の欲しい盆前と正月前が殊に多い。賣る品は季節によつて相違する。

春 乾 魚、その他 夏 わかめ、その他
秋 こんぶ、その他 冬 蜜 柑、その他

この行商は女子の細腕で爲されるものとしては可成り大仕掛けである。即ち此等の海産物の仕入れは殆ど總て下關に於いてなされ、下關の海産物問屋から其等の品物を行商コースの要地の運送店に先に送つて貰ふのである。ハンボウを頭に載せたシャア村の女は其等の土地を中心として附近一帯を行商しながら更に先に進んで行

く。行商の際頭に載せる重みは普通七、八貫で一日の行程は五、六里平均である。十六、七歳の結婚せぬ以前から豊前・肥後・日向等の遠方にまで行商に出るのだから勇敢である。また以前は結婚してもしなくとも十七歳になれば齒を染め二十一、二歳になれば眉毛をあとした。斯様にしてゐなくては旅に出て河を渡る際水神に魅られると言はれてゐたからである。子守りをつれて出る者さへある。

瀬戸内海沿岸のカネリ、カベリの漁村で豊後シャア村程遠方に行商に出る村は無い。長門安岡は下關と長府に日歸りの行商に出る。この町は蒲鉾の製造が盛であるから十月頃から四月頃までの涼い季節には五日間位の旅程で北九州或は三田尻方面にまで蒲鉾賣りに出る者が多い。

周防江ノ浦は柳井町、安藝の能地は三原町より本郷附近まで、共に近在行商である。因島西浦のカベリの行商は島内に限られてゐる。備後の吉和は大部分が尾道方面である。

五 行 商 船

シャア村には行商船とも稱さる可き船が五、六艘ある。行商船の始つたのは二、三十年前からで左程古いものではない。船には一家族全部乗組む。この船は元來は瀬戸物行商船であつて、瀬戸物は石見船から買受けるか或は中國に直接仕入れて行く。植木鉢・たこ壺の類が重である。それに下關で仕入れたいりこ・わかめ・こぶ等を積み別に定つた日取りもなく船を空にするまで豊後海峡の沿岸を廻る。

品物を港で賣捌くのは總て女が行商にまかれ、ハンボウをカベリ日歸りか或は二、三日の行程で附近一帯を行商する。一の港の碇泊は永くとも十四、五日で、仕事も一應終ればまた先の港へ進む。行商區域は豊後海峡沿岸に限られ瀬戸内海に這入るのは仕入れの時のみである。此種に行商船は安藝の能地にも、備後吉和にもある。能地の如きは今は其の土地ではかべらず、行商船に乗るとかべつてゐる。いりこ・蜜柑を

積込んで瀬戸の島々から沿岸を行商する。

この行商船は盆と正月にしか村に歸らない。

一年中旅で暮す。謂はば移動するカネリの漁村である。瀬戸内海一帯から豊後海峽にかけて常にカネリながら廻り歩いてゐるのだからこの事情に通じない旅行者からは中國から四國・九州にかけて至る處にカネリ漁村が在る様に間違はれ易い。

六 物々交換を好む風

昔は斯様に行商して歩くにも物々交換による場合が多かつた。交換されるは米・麥・大豆・小豆等の農作物が重であり、其の他種々雑多なものとの交換してゐた。面白いのはシャアは殊に味噌を好んでゐた。物々交換を好む風は今日でも依然存してゐる。彼女等に直接聞くに其の方が儲けになるからだと言つてゐた。シャアが斯様に物々交換を好む一原因は維新前は彼等の行商區域には小藩錯雜し藩札のことが面倒であつたからでもあらう。

豊後坂の市の満弘寺では毎年五月十八日より一週間開帳の日に雜貨市が開かれる。現今尙市の開かれる初めの一兩日は何等貨幣の媒介に依らずして物々交換が行はれてゐる點で興味がひかれてゐる。大分高商商事調査部から發表された「大分縣坂の市町満弘寺市に關する調査」に次の様なことが書かれてゐる。

「満弘寺が最初兵火に罹りし以後に於て著しく衰頹し、其後盛大なるを得ずして經過したるが、壽永四年平家滅亡の後平家の落人の當市場に集まるに及び再び盛大となれりとの説あり、即ち壽永四年平家壇之浦に滅亡するや車々と稱する平家落人、現今北海部郡海邊村に來りて定住せり、現在に於ては彼等の末裔は單にシャアと呼ばれる。然るに彼等は頗る信仰心が強く、且彼等の信仰するのは満弘寺の本尊と同一なる如意輪觀世音なるが故に屢々満弘寺に參詣せるものなるべく、更に好んで物々交換を行ひしものなるべし。現今に於ても彼等の後裔たるシャアは甚しく物々交換を好み、一の性僻とも見るを得べき程にして、物を得るのに現金を以てするもの殆ど無く總て自己の生産物を以て交換し歩く。故に彼等が當寺院に於て盛に物々交換をなし居たりしことは想像さる。」

四 船舶運搬業

シヤアは部落の位置する土地と云ふものに對して何等の愛著も感じないらしい。これは他郷よりの移住者の常であるかも知れない。漁村は一般に家屋と云ふものに對しては左程の關心を拂はないものである。之が殊にシヤア村にあつて甚しい。殆ど完全に一年を船上で暮す彼等はたまたに部落に歸ることがあつても氣の向くまゝに誰の家でも寝泊りすると云つた風で、全村が親戚とも言へるのだから此點は遠慮がいらな

い。

シヤア村を今まで屢々漁村と言つたが今日ではこれは適當ではない。村の現在の經濟生活の基礎をなすは船舶運搬業である。即ち一年を完全に海上で暮す生活である。現在此村は發動機船四十艘・帆船三十艘・其の他約五艘を有す。此等の船の動きは大體に於いて津久見・貝崎等のセメント工場地と大阪方面を往復するものと、北九州若松方面との間を往復するものとの

二種類ある。

シヤアは村に閉籠つておとなしく漁業に従事するやうなことは氣質に合はない。船を操ることの巧なことは親譲りで、女の行商からでも窺はれるやうに商業的取引に興味を有し、歐洲大戰當時のこの部落の景氣は素張らしいものであつた。

老いたる兩親と小學校に通學する子供達を村に残して船には乳飲兒まで加へて一家族乗組む。小學校に通學する子供達は祖父母や或は親戚にあづけられ、または五、六年生の中には自炊して通學する者さへある。併し全部落が濃い親戚關係にあり互に子供の面倒を見、子供達も別に淋しい思ひをすることもないが併し兩親の顔を見るのは一年に一回、正月だけなのである。以前は盆と正月に入江に帆檣を林立させるのが一の津留村風景であつたが、この頃では正月にのみ然も人だけ歸る様になつた。

鬼に角シヤア村は役場の帳簿面に於ける部落

の人口と實際平時の生活者の人數との間に夥しい隔りを有してゐる。部落の一隅、全戸數の約三分の一、五十一戸に就て役場の帳簿面に於ける人口(A)と實際的現住人口(B)とを比較調査した結果は次の如くである。

(51戸)

年 齡	男		女	
	A	B	A	B
10歳 以下	53	36	51	33
11歳—20歳	41	20	49	27
21歳—30歳	38	9	31	14
31歳—40歳	24	10	29	15
41歳—60歳	23	17	34	30
61歳以上	14	12	13	12
全	193	104	207	131

年 齡	A	B
10歳 以下	104人	69人
11歳—20歳	90	47
21歳—30歳	69	23
31歳—40歳	53	25
41歳—60歳	57	47
61歳 以上	27	24
全	400	235

A一〇〇に對するBの指數

年 齡	總	男	女
10歳 以下	66	68	65
11歳—20歳	52	49	55
21歳—30歳	33	24	45
31歳—40歳	47	42	52
41歳—60歳	82	74	88
61歳 以上	83	86	92
全	58.8	53.8	63.3

其の外に永久的村外出稼者として阪神・北九州・大分市・國東・滿鮮に約百二十世帯あるが、寄留届を出してゐるものは阪神方面の者だけに過ぎない。

昔は金儲けの仕事は大抵女に委されてゐた。男は漁に出たり、家にゐて子供の守や炊事までした。併し男達の船を操ることの大膽にして巧なことは認められて白杵稻葉藩の藩米輸送の仕事は多くこの村にゆだねられた。併し廢藩後は再び細々とした漁業生活に歸るを餘儀なくされ

た。臼杵川の堆積は河口に位置する此部落をして益々漁村としては不適當なものとならしめた。シャア村は元來漁業には上手でなかつた。漁法に網と縄の二種がある。カネリ漁村の多くが左様である如くシャア村は縄を知らなかつた。縄を知らない此村は隣接の漁村の様に遠洋漁業に轉ずるを得なかつた。併し萬事一利一害で、臼杵川の川口に位置することは臼杵方面の諸貨物の運搬の注文を受けるに好都合であつた。明治十六、七年頃には三十石乃至四十石積の帆船が建造され、臼杵近在の藍・蠟・草煙草・米等を伊豫方面に輸送することになつた。其の後次第に造られる船も大きくなり運搬區域も擴大され、下關から肥料・石油或は北九州より石炭を東九州の諸海岸に運送する等の仕事に従事することになつた。

シャア村は全々農業をしなかつたと云ふことは此地方一帯の漁業部落と著しい相違である。漁業の傍に農業をすると云ふやうなことは一般

にカネリ漁村では見られない。農業をしない漁村の老人達は全く暇なものである。これがシャア村をして益々迷信的ならしめる最大の原因であらう。

五 シャア村にあつて特に目につく事の二、三

一 女尊男卑の風

漁村は多少の差こそあれ女尊男卑の傾向がある。殊にシャア村にあつて甚しい。この部落は昔から女子の尊重される風が強く、家庭に於ける萬事は、即ち一家の經濟は勿論金銭・物品の貸借等總て女の掌中にあつた。男は指揮されるやうな立場にあつた。部落の爭論苦情の因は大抵女にあつた。殊に爭論の因は心經組である。心經組と云ふのは四十五、六歳以上の女が八人乃至十人位が一組となつて般若心經を讀み諸病の祈禱をするのである。彼等が眞面目な氣持で心經を讀むのなら問題は無いが家事をかへりみず、お籠りして酒食に耽り、信仰の方面から脱線して他組の惡口を言ふを第一事としてゐる。

井戸傍會議を幾分組織化したやうなものである。

爭論となると男をさそひ女が先頭に進み、まづ女が口角泡を飛ばして争ふ。結極男女入混つての格闘となるが、味方が不利となれば女は檜杓で水を汲み男に飲ませ氣勢を添へる。昔は此村は「親知らず」と云ふ名義で幼兒を貰受ける風があつたが、それは悉く女子に限られてゐた。

二 變つた呼名

シャア村にあつて特に面倒な風習は各人が二様若くは三様の呼名を有することである。學校の先生もこの風習にはほとほと困らされるらしい。戸籍面の名前には殆ど無頓着で部落内での通稱しか知らぬ者が多い。最初附した名を改ると其の子の將來に幸運があると云ふ迷信より生じたものである。この迷信は此村程甚しくなくとも瀬戸内海沿岸漁村一帯の風である。廣島宇品灣の一隅にある丹那の漁村に於いて或る老人から聞いた話では昔此地方では夜泣きをする

子供などあると村の四辻に捨て他人から拾つて來て貰ひ改名したと言ふ。假令動機は迷信であつても今朝市を與左市、今朝治を柚松、松治を島五郎と云つた調子で眞面目な改名であるならばまだ聞きよいが、其の外に多數の者が實に滑稽な通稱を有してゐる。而て幼少の時から通稱のみ呼ばれるものだから本名を知らないものさへ尠くないし、部落内では正式の名前として通つてゐる。これでは學校の先生も困らされる筈である。

悦二郎	ジロニー
倉市	アカン或は克蘭
由次	マークロー
吉四六	ヒチク
松右工門	ヒヨークリ
光五郎	チユーロー
今朝治	ユスマツ
菊五郎	マールー

如何にも日本人離れのした名前である。部落の背後の小丘にある天神社に或日何か得る所はな

いかと石段を登つて見た。拜殿の向つて左手に神馬が置かれ、それに大正十年神馬修繕寄附名簿として次の様な名が載せられてゐた。フシクダ・ナミオソ・竹中ピンツン・ピシヤオロシ・オシヨノ、これでは男か女か分らない。氏神の正式な寄附名簿に斯様な名が掲げられてゐるのである。

三 走り祝言

津留村の走り祝言と言へば白杵地方では有名である。然も今尙すたれない風習である。祝言のことが村民に知らされると村人達は要所々々に肥桶を置き之に汚水泥水を入れて待受ける。

新郎は脇髻と稱する同年輩の親友一人と共に袴をつけ短刀一振を帶し裾をからげて手拭で頬冠りをし藁草履をはき、どちらが新郎か分らぬ様にして新婦の家に向ふ。すると群衆は逃げ廻る二人に眞向から汚水を浴せかけるのである。新

婦の家での式中も汚水を家内に投入れたりして拍手喝采する。次に新郎・脇髻及新婦・脇嫁は一目散に新郎の家に向つて走るのにまた容赦なく汚物を浴せる。茲で兩人は衣類を着替へて盛装し三々九度の式に至つてこの騒ぎもしずまるわけである。

次に葬式では身内の者は出来るだけ泣きわめく程情があるとされ、眞偽の程は確でないが以前は泣人をやとふ風もあつたと聞いてゐるが、若し實際とするならば如何にも朝鮮式である。

(九・九・二〇)

今夏の調査に當つて並ならぬ御援助を給つた津留村の内川由藏氏・海邊村小學校の諸先生・海邊村役場の方々、或は瀬戸内海沿岸處々の漁村に於いて面倒な質問にも親切にお答へ下さつた方々に厚く感謝致します。

更に「シヤア村」の名稱を用ひたことは村の人に對して實に相済まぬ次第ですが、海邊村字津留では餘りにも平凡に過る故通稱を用ひたまでで、此點は幾重にもお詫び致します。